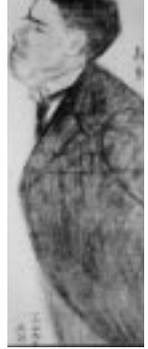


アルファ



[特集]キレル若者達

Nagoya Gakuin University
Library Communications

Vol. 11, No.1



蒙古相撲の力士
中国・内蒙古自治区・滿都拉
図鎮
Ishikawa Terumi, 1998.

キレル若者達

村田 貞雄

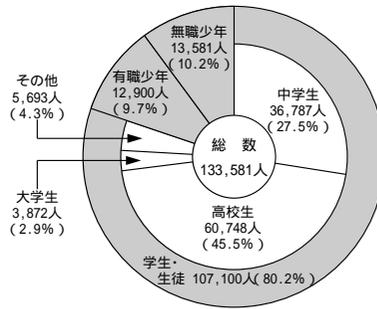
「キレル」には、実感に裏打ちされた若者の自己表現があるように思う。又、この言葉には、キレル前の緊張状態と事後の自己肯定はあるが、自己反省が不問に付されているところに直情的な刹那主義も感じられる。キレル若者達をエイリアンとみる大人達も、世相を映す隠喩としてこの語を定着させたのだろう。キレル若者現象について検討を加える事実認識も知見の持ち合わせも、今の私にはない。キレには、古今東西を通じ、松の廊下の個人的な刃傷沙汰から、真夏の暑い夜の暴動といった集団的なものまで、その実態には多様さがあり、もつ意味も異なるだろうから。

子どもに対する親の過保護と過度の期待が、キレル若者を生産する土壌になっている。小学校時代までのよい子達は、周囲の期待に応えるべく懸命の努力をする。しかし、15の春ないし18の選別期が近づく頃ともなると親の期待も頂点に達する。一方学校教育の効用に対する子どもの目は冷めてくる。耐性を育てなかった過保護の親と社会的選別に加担した学校は、その動機が善意に由来するだけに、張り詰めた弦が切れ、態度が一変した若者の挑戦をうけて狼狽する。

日本の若者について、教育学的には、こんな説明が期待される常識的な回答になるのだろうか。とすれば過度の保護と期待の抑制、学校の選別機能の緩和か又は耐性を育成する教育が肝要となる。しかし、ことは一筋縄ではいかない複雑な問題である。「キレル若者達」は実像か、を問うことも必要だろう。

本学の学生はどうか。昨年末、授業中簡単なアンケート調査を実施してみた。キレた経験有りは71%、その対象は、世間の人35%、友人22%、父親・母親の各14%、教員10%、政治家は4%である。キレル頻度は極く稀で我慢の大切さを86%が肯定し、キレルまで主観的にはかなり我慢している。本学の学生は、我慢を価値と認識し自覚的によく我慢しているといえる。しかし「堪忍袋の緒が切れる」の意味を正確に理解している者80%に対し、「ならぬ堪忍するが堪忍」は4%「韓信の股くぐり」は皆無であった。知行は必ずしも一致しないが、キレやすい若者も「ならぬ堪忍するが堪忍」と三唱するゆとりをせば、多少の効能はある。ただ、キレないのが若者に期待される徳であるかについては一概には論じられないだろう。

刑法犯少年の学職別補導状況



青少年白書(平成9年度版)

「キレ」る子供たちと教育

萩原 隆

教育現場の荒廃、いわゆるすぐに「キレ」してしまう子供たちによって授業そのものが成り立たなくなってしまうという報道を私たちはしばしば聞かされている。こういう社会現象の背景はつねに複雑であり、単純に決めつけると間違いを犯す恐れがあるのを承知して言うのだが、その原因に「がまんすること」(意志の訓練)を教えなくなってしまった教育、あるいはもっと根本的には家庭・社会があると思っている。教育の目的は知識を与えたり、考え方を深めたりすることだが、じつはもっと大事なことがある。それは、とくに初等・中等教育では、学んだり考えたりすることを通して、「がまんすること」を習得すること、少しむずかしく表現すると、意志を訓練すること、よき意志を身につけることである。そして、よき意志が日常化・無意識化するとよい習慣になる。これこそ知識や思考の啓発と並んで、あるいはそれ以上に、とりわけ初等・中等教育の大切な目的なのである。古来、教育の本質は常にここにあったし、それはこれからも変えてはならないものであると思う。

学ぶということは誰にとってもかなりつらいことである。もとより、教師は生徒が興味をもって効率よく学習できるようにさまざまな教育上の配慮をなすべきである。しかし、教える側がどのように工夫をしようと、こむずかしい数学や物理の公式、漢字や英文法や歴史の煩瑣な事項を覚えることがそうそう楽しいわけではない。生徒に無理強いをするのでなく、彼らの自主的な学習努力を引き出すのがよいとよく言われるが、しかし、それとても最初のがまんさせたり教え込んだりすることが必要であろう。「楽しい学校」などというまことに奇怪な言葉を見たり、聞かされたりするたびに私はじつに不快な気分になるのだが、もともと学校の勉強がどうして楽しいのか、少々はつらい、苦しいのが学習の本質である。もし、学習に楽しさがあるとすれば、それはコツコツと努力を積み重ねて少しずつ知識や思考が身についてくるところにあって、それ

以外に勉強の楽しさなどあるはずがない。学校で友だちを作ったり、一緒にしゃべったりすることは楽しいであろう。しかし、それは学校教育の第一義的な目的ではない。

「がまんすること」(意志の訓練)が教育の本質であるといったが、そうむずかしいことを要求しているのではない。きめられた時間に起きること、できるだけ学校は休まないこと、遅刻しないこと、授業は静かに集中して聞き、立ったり座ったりしないこと、私語は慎むこと、トイレは休み時間に済ますこと、毎日一定時間の勉強はすること、遊ぶのは宿題を済ませてからにすること、学校にも社会にも基本的なルールがありそれはかならず守ること、そういったごく平凡なことであり、基本的ながまんである。親や教師はなぜこういったことを繰り返し繰り返し教え込んでいかないのだろうか。周囲の人々がいつも心がけて「がまん」や「ルールの遵守」を実践してみせれば、もっと効果的であろう。

現代の生徒は強いストレスを感じていてすぐ保健室に行くらしい。ある保健の先生がテレビ局のインタビューに「親身になって話を聞いてやるのは私たちぐらいですよ」と、とくとくと答えていたが、私はあきれってしまった。ストレスにも程度があり、体調がひどく悪ければ別だが、人間は生きているかぎり、少しは熱があったり、頭が痛かったり、ムシャクシャしたり、気分がすぐれなかつたりするものである。けれども、勉強することは生徒の大切な役目なのだから、少しぐらい体調が悪くても怠るわけにはいかないのである。私が保健室の先生なら「多少の体調の不良ぐらいでこんなところへは来るな、教室に戻って授業を受けなさい」と叱るのだが、こういう先生は反動的と言われるのだろうか...

朝食の欠食状況

(%)

		昭和50年	55年	60年	平成2年	7年
男	15～19歳	10.7	12.7	10.3	14.1	13.4
	20～29	15.5	19.5	23.5	25.5	30.8
女	15～19歳	14.1	8.3	13.1	10.1	8.9
	20～29	11.7	12.9	14.7	14.3	18.2

厚生省「国民栄養調査」

「キレル」原因を探る

深見 勲

最近、人々のなかに、不愉快な刺激を受けた場合、抑止力がなくなり、理性的な行動がとれなくなって発作的な情動がおこる現象に対して“キレル”という表現が使われている。従来の、衝動的な激情に走るといような表現にくらべて寧ろ現代人、とくに若者の心理にあった言葉のように感じられる。一昔前の人達と今の若者とのあいだにそのような現象が生じる頻度や確率について有意の差があるかどうか正確には解らないが、少なくとも現代は物の考え方が一昔前に比べて正確、窮屈になった部分も多く、若者にとって、些細な心理状態の変化でキレ易い状態になる素地は充分に存在していると思われる。キレルという現象を起こす原因は種々多様であろうが、簡単にいえばヒトの心や気持ちを或る程度以上傷つけたり損なったりする刺激が加わることである。キレル理由にはいろいろなものがある。現代はキレル若者が増えつつある感があり、一頃は高校生が主な対象であったのが徐々に若年化して小学生の低学年層にまで及んでいる。マスメディアの目に付きやすい話題のせいでもあるが、関与するのは一部の人達であるとしても増加しているようである。キレルと云う情報の背景にある事柄として、一般の人々や若者の間にも風評や事実を出来るかぎり正当に評価して伝える手段が欲しい。風評だけが一人歩きするケースが多い。噂が噂をよび、心がキレル遠因にもなりかねない。日常生活においても、日本には「あうんの呼吸」とか「一を聞いて十を知る」と云う例えがあって、その事を重要視すれば人々の気持ちを推察するに便利ではあるが言動が画一化しがちになるので、一方では個性化教育の必要性が強調されていて調和がとれた形で人々の心に浸透するには可成りの時間を要すると思われる。キレタ行動を示す場合でも、大抵の人は正常な精神状態の範囲にあって気が短い長いといった表現で済まされる程度であろう。しかし、キレ易い性格を作る例として生育環境の影響が考えられる。子供の生育期に、両親からは生き様や態度などについて厳しく躰られた事もなく、周辺の人達からは、当たらずさわらずに放任されていて、全く実力が伴わないおやまの大将であるため、兄弟間で激しい生存競争にさらされる事もなく甘やかされて育ったような子供は我侭に育つ事が多くなると思われる。キレルかどうかの問題よりも先にその原因を考える必要がある。何事も原因が最も重要で、結果だけを論じるのはよろしく

ない。キレルという結果が生じる場合、他者による原因があってキレル場合、他による原因は特になく自己の内面的葛藤のためにキレル場合も考えられるので、結果ばかりを問題にする情報の一方通行はよろしくない。「健全な肉体に健全な精神がやどる」というように上記のような精神、環境面での問題の他に、人体が肉体的、精神的に健康を維持するためには過不足なく栄養素を摂取する必要があり、この事も若者がキレル問題と或る程度関係していると思われる。第二次世界大戦の頃、欧米の軍人が出来る限り命を大切に戦争の為に異常に骨身を削らず、常にユウモアを持ち続けたのは血中のCa量が充分であり、Caによる精神安定作用、鎮静作用が足りていたという説明がされていた。無機イオンのうち神経伝導や神経の機能に関係しているのは、Ca、K、Na、Mg等であるが、日本人のCa摂取量は欧米人のレベルに比べて低く、国民栄養調査からも不足状態にあるが、若者の方に不足量が多い。それには、若者のなかに、食事が著しく不規則であったり、欠食、偏食の人の多いことが挙げられる。近年、CaとMg(大豆、魚、海藻などに多い)の摂取比率は2:1が適当(久郷氏)であり、米国で凶悪犯罪を犯した少年の場合、Mg摂取量が少なく、この比率が基準値から大きく外れるとキレル子供が出来やすいと云う報告がある。加工食品やインスタント食品にはMgが少なくなっており、これらを食べる頻度が多くなるとCaも体外に出やすくなり、益々、不足状態になる。その結果、精神的な抑制作用が低下して、キレル易くなる事が推測出来る。また、他の原因として、異様な映像や暴力シーンなどの、キレル事への影響も無視する事は出来ない。他に、キレル現象を増すのは精神的、肉体的な過度の疲労である。友人間でも長時間共同で仕事をしたりして疲労が重なるとキレル頻度が増すことは確かであるが、精神疲労によるビタミンB₁の消耗なども一因かもしれない。しかし、生理学、生化学的な詳細は解っていない。従って、キレル易くなる原因を推測すると、不自然な生育環境(道徳教育の欠如、人間愛の貧困さ、偏食や不規則な食生活、精神疲労)等が考えられ、キレルに到る過程は複雑に関連している場合もあるが、食生活など個々に気付く点があれば改めるべきであるし、家庭、社会で矛盾が生じた場合、原因を究明するための一層の努力が必要であろう。

素直な心

達本美香

今の日本の若者は、甘えが強くちょっとした事ですぐ「キレル」という言葉をよく耳にする。実際にはどうなのだろうか。私を知る日米の学生についてここで少し触れてみたい。

私がアメリカで大学院生だった頃、授業を受けてまず驚いたのはその大らかさであった。専攻が教育関係だったこともあって、学生は教員をしている人が多かったのだが、学生も先生もチョコレートなどを食べながら、そして中には寝転びながらという学生もいて本当にリラックスした雰囲気であった。

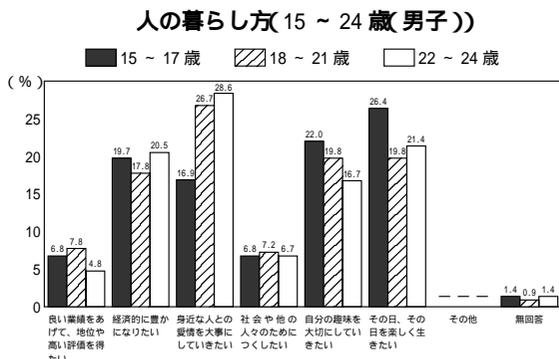
しかしながら授業は活気に満ちていて、学生からの発言や質問が多く、そのために授業が滞ることもしばしばだった。さらに、授業内容や評価は厳しいもので、涙が出そうになった事も一度や二度ではなかった。その時にアメリカというのは一見自由で楽しそうに見えるが、その反面取らなければならない責任も重いのだと強く感じさせられた。

この時受けた印象は、その後ロサンゼルス郊外のマリブという町にある大学でアメリカ人学生を教えるようになってからも変わらなかった。

リラックスした雰囲気の中で学生は常によく質問し、発言も活発で質問攻めにあうことも少なくなかった。彼らは目的意識が明確で、大学での成績が就職に大きく関わっていることもあって授業態度は常に真剣そのものであった。

さらにその行動や積極性にも目を見張るものがあった。ある時、私の日本語中級クラスを受講していた学生達が「上級クラスも先生に教えてほしい」とやって来たので、それは私が決められることではないと説明すると、今度は他の学生達の署名を集めて来て、授業で「We Want!」の合唱を受けた。その時、ただあっけにとられ呆然としてしまったのを今でもよく覚えている。さらに彼らは学科長のところへ直談判?に行き、とうとう彼らの要求は通ってしまったのである。

このような経験をしたためかどうかは分からないが、



「日本の青少年の生活と意識」 総務庁青少年対策本部

日本人学生は当初とても頼りなく甘えが強いように思えた。

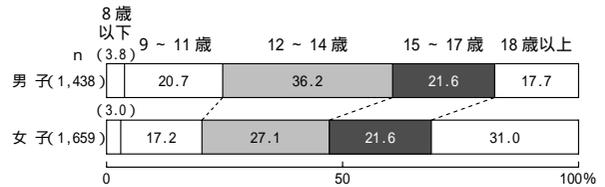
しかし、すぐにまた違った印象を持つようになった。学生達に授業の感想などを無記名で書いてもらおうと、本当に素直な心を持っていることや口には出さなくともきちんとした彼らなりの意見を持っていることが伺えるし、授業でも発言し易い環境を作ると、皆の前で臆することなく発言し、それが当たり前に行える能力をそれぞれが持っていることに彼ら自身が気付き始めたからである。

昨今、犯罪の低年齢化や中学校等での「学校崩壊」への脅威、さらには「伝言ダイヤル」といった類のものへ過剰な依存を来す若者達の事が取り沙汰されているが、若者らしい素直な心を失わず自分の目標に向かって努力をする若者もまだまだ多いのではないかという希望を持っていたいものである。



「キレル」と言葉の科学との関係 言語学への誘い

パソコン・ワープロ接触年数(男女別)



「情報化社会と青少年」 総務庁青少年対策本部

赤 楚 治 之

今から二昔ぐらい前の話、学部学生であった僕は言語学の入門コースを履修していた。ある時、先生が「言語変化」についての講義をされている途中に、教室で「意味の変化」についての簡単な調査をされた。「気のおけない奴」という表現の解釈を問うものであった。それまで僕は自分の解釈と異なる解釈があるとは全く知らなかったし、半分ぐらいの学生がその解釈でしか使わないとわかった時には本当に驚いたものだった。

このような体験のせいもあってか、僕は、授業中に自分がその時に研究していることを調査することがよくある。それは自分の研究のためというよりは、むしろ、言語学的な分析を学生が経験することによって、言語学を身近なものに感じてもらうためである。例えば、「太郎は来た」は肯定文だが、「太郎って来た」はどうか？「アメリカ人って長身」の場合はどうかなどである。それが学生たちには奇妙に映らしく、「先生っていつもそんなことを考えているんですか？」と言われたりすることもよくある。ちょっと距離を置いて考えると、そのような学生のコメントは正しいかもしれないという気になるし、世間一般の人から見れば、「この人一体何をしているのか」ということになるのかもしれない。しかし、何と言われようが、やっぱり言語学は楽しいのである。

「言語は時間と共に変化する。(= 「言語変化」)」これは言語学の基本概念であるが、これ自体理解することはさほど難しくはない。高校生のときに『源氏物語』や『枕草子』など古典の授業で苦労したことを思い出せばよいし(最近では森鷗外の『舞姫』も読めなくなってきたらしい)、ShakespeareやChaucerの英語も高校までの英語学習では読めないことからわかる。しかし、それらは比較的長い時間軸をとって見た場合の変化であり、言葉の変化が現在進行形で起きているというのはなかなか実感としてはわかりづらいところがある。

それでも、流行語や新語といった語のレベルでは、

変化の度合いが顕著なので、言語変化を身近に感じることができる。特に学生たちが使う若者語は流行り廃れが早く、その分、彼らにはわかりやすい。今の学生には、生まれた頃に流行った「エガワる」(プロ野球の江川事件から)という語を知っている者など誰一人いない。「チョベリバ」など、ほんの2年ぐらい前にマスコミ等で取り上げられたコギャル語だが、今こんなことばはギャグでも使えない。若者ことばを研究している米川明彦氏は、昨年、流行語となった「キレル」(「きれすん」を含む)、「むかつく」等は、コミュニケーションを拒むという心的状況を反映した、エゴイスティックな言葉であると分析しているが、出来るなら、そのような(意味での)言葉が一過性のものであって、日本語に定着しないでほしいものだ。

言葉の変化は、そのような語彙だけにかぎられることではない。昨年に出た井上史雄氏の『日本語ウォッチング』(岩波新書:1998)は、「日本語の乱れ」として言われている日本語の変化(「ラ抜き言葉」や「平板アクセント」等)を、約20年にわたる全国的な調査で検証し、耳新しい言葉の出現の背後ではたらくメカニズムや日本語の変化の大きな流れを論じた好著である。「言語変化」の大きな流れと言えば、約80年前にエドワード・サピアが書いた高度な言語学入門書である『言語:ことばの研究序説』(岩波文庫(安藤真雄訳):1998)が思い出される。この本には、エキゾチックな言語からの例が豊富にあり、サピアの深い洞察力に感銘を受ける。「言語変化」とは直接関係があるわけではないが、青木晴夫氏の『滅びゆくことばを追って』(岩波書店:1998)はお勧めの一冊。1972年に三省堂から出版され、絶版になっていたのが、今度は岩波書店の「同時代ライブラリー」に入ることになった。1960年夏からのアメリカ先住民族の言葉であるネズパース語のフィールドワークの記録だが、一日本人言語学者とネズパース族の人たちとの心温まる交流が瑞々しく描かれている。

少年犯罪について

大久保江美

近年、中学生・高校生による犯罪が多数起っている。中学生が同級生をナイフで刺すという事件も起こったし、数人の若者集団が中高年の男性を脅す「オヤジ狩り」と呼ばれる事件も起っている。このような事件を起こした少年達は、その動機について「バカにされてるような気がした」、「ムカついた」と口々に言う。

なぜ少年達はキレるのだろうか。確かに、中学生・高校生といえば思春期でもあり、多感な年頃である。ちょっとしたことで頭にくることもあれば、訳もなくイラつくこともあるだろう。しかし物事の善し悪しは分かるはずである。ナイフで刺したら、相手は体だけでなく心も傷つくのである。後で起こる最悪の結果も考えないで、一時の感情のままに行動するのは子供のすることである。

少年だからといって、罪からまぬがれる訳ではない。

しかし、神戸の事件に関しては疑問を感じた、この事件はあまりにも有名だが、罪を犯した14歳の少年は3人の子供を殺しただけでなく、その体をバラバラにするという残虐な行為をした。しかし彼は少年院に入っただけで、いずれは社会に復帰できるのである。少年だから、という理由だけでである。

現在少年法は被疑者が未成年の場合は全ての事件が家庭裁判所に送られるよう制定されている。たとえ殺人を犯し、どんなに残虐な行為を起こそうと、少年達は刑をまぬがれてしまうのである。しかし近年あまりにも少年犯罪が多発しているために、法務省は14歳以上の少年に刑事罰を科することができるように少年法を改正する案を検討中である。

これから少年犯罪の低年齢化はますます進むであろう。少年法の改正はこのことから不可欠であるといえる。

おおくほ えみ[経済学部経済学科4年・藤井ゼミ]

『夢』いつまでも

篠田 信

当図書館報へ『キレる若者達』というテーマで原稿執筆の依頼を受けました。大学院生である私は、20歳の息子と18歳の娘をもつ親でもあります。この原稿を書いている1月15日、息子は成人を迎えました。成人式に出かけるためスーツ姿になった彼に、私はネクタイを結んでやりながら、これまで共に生活してきた中で、出くわし、そして乗り越えてきた山や谷のことを思い出しつつ、新しい青年が我が家にも生まれたことを実感し、彼の新しい将来に「夢」多かれと祝福しています。

さて、テーマについてですが、私は社会学や心理学を深く理解しているわけでもありません、評論家でもありません。団塊の世代と言われる社会人で、かつ、1960年代の学園紛争の中、青春を過ごしてきた者としてお話ししようかと考えていました。

そんな折り、新聞に青少年の非行が増え、凶暴・粗暴化が進んでいることが掲載されていました。

1998年度版「青少年白書」によると問題行動を起こした少年の特徴について「欲望や衝動をコントロールできず短絡的」被害者や周囲の受ける悲しみについての認識に欠ける」などと指摘している。また「大人が将来に期待を持っていないような社会の閉そく感・不安感、青少年の意識にも影を落としている」とも言い、大人社会への不安感が青少年にも悪影響を与えていることを強調している、と報じていました。

また、このテーマについて何を書こうかと迷っていた時、ふと目にした週刊誌には「身勝手な子、非常識な親」という特集記事があり、親の身勝手さを見習う

子どもたち、そのマナーの悪さ、傍若無人ぶりについて掲載されていました。“家庭でのしつけが消えた”ことをとりあげ、親たちが、子どもとどう血の通った関わりを持つか、人との繋がりを紡ぎだしていくのか、といった問題の提起をしていました。

「キレたり、傍若無人であったり、周りへの目配りもない」若者や子どもたちにしている真の原因は、大人たちとその社会環境にある、と言っています。

私たちを取り巻く環境、家庭や学校、企業など、本来人間の「人格」を認め合い、尊重しあわなければならない場にもかかわらず、それを傷つけ、踏みにじることが、公然と行われているのではないのでしょうか。家庭内[親子、夫による妻への]暴力、臭いモノには蓋・切り捨ての教育、リストラと称した企業内暴力など、多くの若者や子どもにとって、大人にとっても「夢」を持って生きて行くことが困難で、その芽さえも摘まれてしまう社会環境になっていると思います。

今、私たち大人は原点に立ち返って、信じ合い、人を愛することの大切さを考える時だと思えます。それは、個人にとっても、学校や企業にとっても必要なことだと言えます。また、「夢」を持つことで、それぞれが変革をし、成長して行くことに繋がるのではないのでしょうか。

私は一粒の麦となって(学部時代の宗教学とチャペルの時間には熱心ではありませんでしたが)企業や社会の中で、一人でも多くの人に理解してもらえるようにそれらを実践して行きたいと思っています。

図書館司書一年目で感じたこと



樋口 優子

昨年の四月より、私は縁あって本学の図書館で働くこととなった。名古屋学院大学とも、図書館司書という仕事とも初対面である。

私の担当は学術情報サービス係ということで、経験ゼロの私ではあったが、図書館勤務初日より恐れ多くもメインカウンターに座ることとなった。カウンターに座ってしまえば新人だろうがベテランだろうが、やはり学生の目には他の図書館員と同じように映ってしまうようで、いろいろなことを聞かれるのだが、最初の頃は何に対しても十分に答えられない。そんな状況が私にとってはとてももどかしく感じられ、参考図書室や書架をうろろうして資料の名前や配置を一度に暗記してしまおうと無茶をしてみたり、先輩方と利用者とのやりとりに耳をすまし、自分も見よう見まねで対応しようとしたりと、どうしたら追いつけるのかただがむしゃらにその方法を模索していた。

そんなふうにして私の図書館員一年生は始まったわけだが、いつでも問題は盛りだくさん、かなり険しい道のりである。

まず、レファレンスへの対応。私たちカウンター担当図書館員にとって最も重要な仕事がレファレンスであると同時に、私にとっては最も頭をひねる難しい仕事であるともいえる。

何か事を起こそうとするとき、私は今までずっと何らかのマニュアルを有効活用するのが最も効率的な方法であると思っていた。そのため、当初はレファレンスにもそれなりのレファレンスマニュアルがあると思い、そればかりを求めていたように思う。だが、そのようなものはいつまでたっても見つからない。確かにレファレンスに対応するための攻略方法等はあるが、それには完全なマニュアルがあるわけではなく、各々の図書館員が持ち合わせている知識を有効活用し、自分なりの方法で対応していくものようだ。図書館には図書館員の武器となるレファレンスツールがいたるところに非常にたくさん備わっている。それらをいか

にして上手く活用し、自分のものとしていくかだ。私のような未熟者のレファレンスに対する武器、知識の乏しさには悲しいものがある。こればかりは経験がものを言う。それについては嘆いてもしょうがない。

そして学生への対応。これがまた新人の私にとって悩みの一つとなっている。

日頃カウンター内で仕事をしていると自然と学生の姿が目に入ってくる。携帯電話を横に携えながら会話にふける学生がいる、と思えば、参考図書室でしっかりと分厚い文献目録を自由に使いこなし、黙々と勉強に励む学生もいる。同じ大学の学生であるのに、実に様々な学生がいるものである。このような学生達との対応を毎日こなしていくのは骨が折れる仕事である。

また、図書館では学生を対象にガイダンスを実施している。私も図書館で働き始めて間もなく、このガイダンスを担当することとなった。そこで私は、まず彼らの無関心さが意外であった。そして学生の図書館ばなれを実感した。

彼らの大半は全く図書館には興味がありませんといった様子である。何を説明してもそれはこちら側の自己満足の世界。ふと、図書館に足を踏み入れることなく卒業していく学生は意外と多いのではないかという考えがよぎった。そう考えると図書館と利用者が会おうチャンスをもっと大事にしていかななくてはならない。なにも図書館を利用することを期待して入学してくる人はいないだろう。そうなると何か付加価値がないと単なる本の貯蔵庫という印象のままで終わってしまう。それではあまりに悲しい。

時代は変わる。学生も変わる。図書館員も時代の波に乗り、アンテナを磨き知恵を絞っていかなくてはならないだろう。図書館司書という仕事は、カウンターの番人ではなく、自分で何か新しいことを考え、造り出していくというとても創造的な仕事なのである。

Information



- 1 キレル若者達
- 2 「キレル」子供たちと教育
- 3 「キレル」原因を探る
- 4 素直な心
- 5 「キレル」と「言葉の科学」との関係
言語学への誘い
- 6 少年犯罪について
『夢』いつまでも
- 7 図書館司書一年目で感じたこと
- 8 Information
編集後記

図書館で資料を探すには？

図書館では、図書以外に雑誌・新聞など様々な情報を提供しています。そのため、図書館には膨大な情報のなかから効率的に必要な情報を入手するための検索手段が用意してあります。それらを上手に活用して、レポートや卒論の資料集めに役立てましょう。

資料の探し方、検索方法、端末の使い方が分からない場合は、あきらめないでカウンタで質問してください。

1. 本学の蔵書を探す ~OPAC検索~

本学の蔵書をコンピュータで検索できます。書名や著者名から、また書名中のキーワードを手がかりにテーマに関連する図書を検索できます。

2. 雑誌記事を探す ~CD ROM検索~

レポートや卒論を書くとき、図書以外に雑誌記事も重要な資料となります。『国立国会図書館雑誌記事索引』を使えば、1985年以降国内で発行された雑誌の記事や論文をキーワード・著者名などから検索できます。本学に所蔵していない雑誌については、他の図書館より論文のコピーを取り寄せることができます。

3. 新聞記事を探す ~オンライン検索~

カウンタ内の端末を使い、日経四紙、朝日、中日などの新聞記事をみなさんと一緒に図書館員が検索します。何についての記事を検索するのか、キーワードを

留意してカウンタで申し込んでください。その他、企業検索や有価証券報告書の出力もできます。

4. インターネットで探す

図書館のホームページでは様々なページへのリンク情報を提供している他、Nichigai/Webサービス(日外アソシエーツ提供)により、1926年以降の書籍検索、1985年以降の雑誌記事検索などが利用できます。

土曜日も閉館しています

図書館は土曜日も閉館しています。レポートや卒論作成のための資料探しにぜひご利用ください。サービスは、図書の貸出と返却に限定しており、資料相談・オンライン検索は原則として行っていません。多くの方の来館をお待ちしています。

閉館時間 10:00~16:00

雑誌のバックナンバーを差し上げます ~人気雑誌リサイクル展~

ブラウジングルームにある雑誌のバックナンバー(昨年分)を先着順で希望者に差し上げます。期間中は補充していきますが、なくなり次第終了しますのでお早めどうぞ。

期間: 5月10日(月)~5月21日(金)

場所: 2階メインカウンタ前

編集後記

今年1999年は、ウォールストリート発1929年世界大恐慌から丁度70年である。

現在、米国を除いて世界的に不況が深刻化している。とりわけ、現下の日本の不況は深刻である。この不況の性格を巡っては諸説が入り乱れている。さすがに「景気循環型不況」説は長期にわたる日本の不況の説明には分が悪くなってきている。

おそらく「構造不況」説が「大恐慌型不況」説が正しいのだろうと「日本経済新聞」エコノミスト(毎日新聞社)読者の「自称にわかエコノミスト」は認識しているところである。

この不況はデフレ局面に入っていることは間違いなく、日経新聞は98年12月の日銀短観の分析を通してデフレバイラルの懸念を表明した。

デフレの進行は当然にして経済の収縮をもたらし、企業業績の低迷、リストラの横行、賃金の低下、消費の不振と連鎖していく。

景気の先行指標とされる有効求人倍率は98年11月には0.47%と過去最低となり、運行指標である完全失業率も同時点で4.4%と過去最悪となっている。今年も昨年同様にリストラ、失業、倒産、個人破産、犯罪が激増し戦後最悪の「大変な年」になると思われる。経済雑誌を読んでも明るい兆しはどこにも見られない。

こうした事態にどのように対処すべきか。賢者は「事態を直視し、最悪の事態を想定して対策をとる」のに対して愚者は「当面のその場しのぎの対応でごまかしていく」のである。もはや、日本のみならずいかなる企業や団体といえども問題の先送りは許されない状況となってきた。

賢者は最後には勝つ。経済危機に対するここ数年の日本の政策当局の失敗は愚者の典型であると思われるのである。キレルのは若者ばかりではない。この深刻化する不況の長期化に伴って、生活破綻からキレル大人も発生する可能性は高いとみなければならない。(倉)

名古屋学院大学附属図書館報「アルファ」Vol. 11, No.1 1999年4月1日発行

編集・発行 名古屋学院大学附属図書館 〒480 1298 愛知県瀬戸市上島野町1350 TEL0561 42 0352 FAX0561 41 2515